

デザインは人のためにある 産学共同教育で気づき 自分を高めてほしい

京都芸術デザイン専門学校 理事長 徳山 豊
取材・文／堀水潤 撮影／中岡邦夫



【理事長プロフィール】1965年生まれ。89年ボストン大学経営学部卒業。都市銀行を経て、92年学校法人瓜生山学園事務局勤務。99年同学園常務理事、財団法人日本文化藝術財団理事。02年学校法人京都国際観光文化学院理事長。

【学校プロフィール】1983年京都国際文化専門学校として設立。2000年に校名変更。2年制のクリエイティブデザイン学科(4コース)と、4年制のデザイン総合学科(2コース)。グループ校に京都造形芸術大学ほか。

専門学校の役割は、実社会が求める人材を育てることです。私たちはそれを、即戦力たりうる知識技術を身につけたうえで、人間性にも優れた人材だと考えています。

そのため、専門教育と人間教育をイコールのものととらえ、左右の歯車のごとく、かみ合うようにすべきだと信じて疑いません。

「ここは学校ではない。デザインオフィスである」というフレーズを掲げ、講師をデザインオフィスの上司、学生を新入社員と見立てているのも、その表れです。講師が、実際の業務と同じ視点で講義を行い、また、挨拶指導なども徹底します。これによって学生はプロの世界の厳しさを知るはず。

同時にこれは、講師に向けたフレーズでもあります。講師は、常に学生に見られている存在です。上司として、己を律し、緊張感のなか、学生と100%の力で向き合わねばなりません。

企業から依頼された業務に取り組み「受託研究制作」という課題もあります。これは、必修のインターンシップとともに、本学が掲げる産学協同教育の柱です。これまで、多数の企業・団体から、パッケージデザインなどの業務を請

け負ってきました。なぜ、クライアントは、技術面でプロに劣る学生にチャンスを与えてくれるのでしょうか。

それは、夢のあるアイデア、熱のこもった作品を生み出す力に期待していることだと確信しています。

そのため、プロジェクトを開始する際は、企業の方に、商品に対する愛情や熱意を学生に語っていただく場を設けるようお願いしています。

そこで私が学生に感じてほしいのは、「愛情や熱意をしっかりと受け止め、愛情や熱意で応える」という姿勢。そして、「芸術やデザインは自分のためではなく人のためにある」という発想です。

本学は、かつてビジネス系の学科をもつ専門学校でした。そこから芸術、デザインへとシフトした理由の1つは、「無から有を生み出す」デザイン教育を通じて、よろこびを見だし、その延長線上で自分の可能性に気づかせることができるのではないかと考えたからです。

夢や希望をもちつらい時代といわれています。そんななか、「自分には可能性がある」と気づいてもらうこと。気づいている学生に対しては、より高みを目指すよう導くこと。これが私たちの使命です。